

平成17年3月23日(水)、伊藤忠商事事業進出研究会でセンター長が講演しました。
その概要は以下の通りです。

大局的観点から見た中国の将来像

講師：環日本海経済交流センター長 藤野文昭
(元伊藤忠商事常務取締役 中国総代表)

本日は実務的観点というより、もっと別の観点から中国をどうというふうに見るか、中国の将来はどうなるかについて話したい。

44年間も伊藤忠にお世話になって中国だけやってきた人間はほとんどここにいないと思うが、中国はやればやるほど分からない国という印象を強く持っている。

ただ日本人としてはそういうわけにいかない。隣の強大な国とどう付き合っていくかについて一つの検討材料を皆様に提供したいと思う。

沿海部から見た中国と内陸部から見た中国

中国を見ると、北京・上海・広東からみた中国と、モンゴルや新疆からみた中国では大分違うということをまず皆様に申し上げたい。

中国を一つの国として一体どういう風に見たらいいか、おそらく日本では誰も明確な答えを持ち合わせていないと思う。

上海の年間一人当たりのGDPは5,000ドルになるかもしれないが、しかし、ウルムチのGDPは1,000ドル以下、こんなに差が有る。しかし、どちらも同じ中国である。例えば、上海から見た中国とウルムチから見た中国をどういうふうに一体化して考えたらいいか、中国をどういうふうに一つの概念として纏めてみるか、というプロジェクトに誰も挑戦していないが、やはり我々はビジネスマンとして良く考えないといけない。

多民族国家中国の意味するところ

昔に戻って中国をみよう。唐の時代から近代まで、西暦1200年からの700年間、歴代の王朝のうち、漢民族中心の統治ではなく、モンゴル族や満州族

などの異民族中心の統治が多かった。

中国は13億の人口がいる多民族国家。92%は漢民族、8%は55の少数民族が存在している。56の民族が一つの屋根の下で生活している。だから違った顔にみんな見える。しかし、どれも中国、異民族の支配してきた王朝のほうはるかに長い。

日本には少数民族がほとんどいないため考えられない。

近代の中国人たちはブラックホールの中に全て投げ込んで中華世界を作り上げた。

日本と全く違った世界となっている。

中国は孔孟の儒教哲学を実践して民族の倫理観を作り上げてきた。

日本は遣唐使を派遣して儒教文化を修得して日本に伝えたが、中国では儒教が個人の倫理観であるのに対して、日本は国全体の倫理観となっている。

日本人の場合、ほぼ大和民族一つなので、外から来た異民族と一緒に住むことはほとんど不可能と言っているほど考えられない。

例えて言えば、中国は貿易総額の中、外資の比率が極めて高い。現在60%ぐらいに達している。しかもこの比率は年々上昇している。こうした事態は日本では容認しがたく、そもそも考えられないこと。

つまり、中国というのは国家ではなく、中華という一つの世界である、日本人は悪し様に中華思想というが、中国はそう思っていない。56の民族が一体になってみんな一つの屋根の下で5000年も暮らしてきた。それが現実の中国である。

中国を見たら、中華人民共和国、中国共産党一党独裁の国だという発想は間違っている。

なぜ中華人民共和国になったか、なぜ共産党一

党独裁の天下になったか。近代史をみればわかるだろうが、ここで諸先輩の前で説明は要しないが、56の民族が一つになってその看板は中華人民共和国。台湾も同じ中華民族だから、台湾問題について譲歩しない。共産党政権が中国を引っ張っている。

歴史の混乱から蘇る中国

日本の村社会も立派な社会だが、圧倒的に中国とスケールが違う。国際性も違う。

隋唐時代にはみんな中国を訪ねた。世界の道はローマに通じるが、西安にも通じていた。中国は植民地を作らなかったのだから去る人は去った。日本人も去っていった。遣唐使も突然やめた。それから日本は鎖国の道を進み始めたが、中国は依然として開放的だった。だから、外国から侵略を受けて、アヘン戦争以来、国内が混迷を続けた。しかし、だから中国はだめだ、中国人は弱い民族だと言うことは間違っている。

日本人は1931年の満州事件、1937年の盧溝橋事件くらいの歴史しか知らない。そして中国みたいな弱い国がある日突然、歴史に蘇ったことは一体どういうことだと、みんなびっくりしているが、歴史を見たらわかること。

アヘン戦争までの中国が世界のGDPの約30%を占めていたことは間違いない、世界最強の大国だった。しかし産業革命に乗り遅れて、諸外国の侵略を受け、ほんの1世紀半から2世紀の間、歴史に翻弄されてしまった。最近では元の最強国家に戻ろうとしている。

なぜ戻れるのかというと、能力があるから、中国人は優秀なDNA、優れたアイデンティティを持っているからである。

1978年、鄧小平氏は改革開放政策を実施し、社会主義市場経済路線を進めていく中で、国民に自由に能力を発揮する場を提供したら、あっという間に発展した。

いま中国のGDPは1兆6000億ドルで世界第5位。貿易額は世界第3位。外資50万社を受入れ、その外資投資額は約1兆ドルに達し、世界最大の外国資本受入国となった。

私は十数年前から中国は必ず強い国になると思っていた。

内陸部開発のすすめ

今度の全人代（本年3月5日～14日開催）で中国は何を議論したかということ、次の三つのキーワードがある。

- (1) 「和諧社会」の実現を目指す。調和の取れた社会をつくり、皆仲良くしよう、と言う意味。
- (2) 「三農問題」の解決。「三農」とは農民、農業、農村のこと。
- (3) 「腐敗墮落」を徹底的に取り締まる。共産党は自浄努力を進め、執政能力を高める。

これら三つのキーワードをこれからどうするかが、胡錦濤・温家宝政権の最大のテーマとなるだろう。

中国の地図を見てみよう。中国は内陸の開発を真剣にやらないと将来がない。この三つのキーワードは全部内陸の問題と関係している。

中国のGDPの70%を稼いでいるのは、上海を中心とする華東地区、広東を中心とする華南地区、渤海湾中心の北京、天津、山東省という中国のわずか3割の地区。あと7割の地区は、ただの30%しか稼いでいない。

ただし、日本企業はみんな稼いでいるところに目を向けて、誰でも内陸の方に行きたがらない。そんな奥深い地区に行って稼ごうとしない。

だから大連、青島、上海などの海の見えるところにしか進出しない。特に日本人は海が見えないと不安になるのではないか。でもそれは間違いだ。成都でイトーヨーカ堂の成功例を見たらよくわかる。

農民は土地にくっ付いている、なかなか土地から離れられない。出稼ぎにいく農民もいるが、それはほんのわずか一部である。

内陸に行ったら少数民族が一杯いる。貧しい、一人っ子政策を採っていない。

毛沢東も劉邦も農民出身。毛はなぜ蒋介石に勝ったかということ、農村が都市に勝ったからだ。毛は農村で紅軍を組織して都市を包囲し国民党に打ち勝った。だけど毛はその後、経済政策に失敗した。

その次の鄧小平は70代にして開放政策を実施した。その開放政策の結果、都市は農村を放棄した。鄧が最初に開放したのは広東だった。なぜ広東から始めたかということ香港に近いから、非常にやりやすい。香港は物を作る場所がないからどんどん深圳に来る。その次に90年代に入り、上海を開放

した。都市が農村に勝ったということ、都市はどんどん発展してしまい、その陰で農村は放棄されてどんどん遅れていった。

鄧小平の次に江沢民は鄧小平の意思を守って、98年、西部大開発政策を始めたがなかなかうまくいかない。

現在の指導者は胡錦濤主席、温家宝総理。

胡錦濤は中国共産主義青年団という若手エリートたちを養成する機関の出身。先輩に胡耀邦がいる。西藏、青海という泥まみれの田舎にばかり駐在していた。

温家宝は天安門事件の時、元総書記の趙紫陽と一緒に学生の立場容認を提案した人。だけど趙のように失脚しなかった。今は首相となった。

この二人が手を組んで内陸開発に取り組んでいる。だから内陸開発はこれから絶対やる。

内陸開発の要点は「東から西に向けて風が吹く」ということ。

東はもう既に発展した。西は内陸の農村から中央アジア、中央アジアの向こうは欧州。北はロシア。狙っているのは中央アジア。ガス、石油が一杯ある。

日本は島国だから、なかなか動かない。タイやフィリピンに行くかどうか悩んだりしている。どうせやるなら中国を纏めてやるべき。

西部の前に中部を発展させる。

中部というと、湖南、湖北、江西、河南、山西などの各省。というわけで、とりあえず、武漢、西安、昆明に事務所を設立すべき。

いま北京 - 上海の新幹線は政治問題化してなかなかまとまらないが、これとは別に新しい高速鉄道の始点を3箇所で作ろうとしている。

- (1) 武漢 - 西安
- (2) 南昌 - 広東
- (3) 北京 - 天津

中部は中国が力入れてやる。ASEANとの交流を引っ張るのは昆明、雲南。

今の中国経済発展について概括すると、投資が大きかったからGDP成長率が高い。

我々にしたら日本から中国を見るより、中国から日本を見たほうがいい。なぜなら中国の変化が大きいため、中国の強大な変化には日本はついていけない。

どうやって内陸に着手していくかを考える。島国の発想から離れるしかない。

欧州、米国、ロシアとの関係

現在、中国の最大の貿易相手国はEUとなった、EUはいくつかの国が一緒になっているから、独のシュレーダーさんも仏のシラクさんも一生懸命中国に足を運んでいる。

4年間に首相が一度も行かない経済大国は世界中で日本だけ。全く信じられないことだ。

貿易相手国として、2位はアメリカ。貿易額は2,000億ドルに近づいている。日本の方は貿易額がEU・アメリカと比べ伸び率が低い。新聞はいいことばかり書くが、実際はそうではない。

最近中国はロシアと仲良くなっている。鄧小平の時代はロシアは最大の敵国だったのに、今は最大の友好国となっている。

台湾問題について中国は一国二制度を採ると言っていない。香港（一国二制度）の開放の時よりもっと自由にやらせるつもり。

日中間の文化の違い

最後に日中の文化の違いについて話したい。

水に流すという言葉は日本にはあるが、中国にはない。死んだら仏さんという発想も中国にはない。仏教の発想では今生きている世界は仮の世界だ。中国の場合は今生きている世界が全てだ。「同文同種」と言われている。日本は中国から漢字を導入し、平仮名と片仮名を発明したが、文法も発音も全く違う、同文同種ではない。日本語は小異を捨てて大同につく、と言うが、周恩来は、小異を残して大同を求めると言う意味の「存小異、求大同」と言った。小異は捨ててはいない、小異を残して、と言っている。この辺が日本と中国は違う。水に流す、すなわち小異を捨てるという言葉は中国には無い。

日本には天皇制があり、官僚制があり、組織があり、個人がある。日本では会社の社長の話は皆聞く、反対意見を言う人はあまりいない。中国は個人の社会、個人があって、家族があって、会社はその次に来る。

中国でビジネスする可能性は無限だと思う。昨年は9.5%の成長率だった(昨年3月の全人代は7%と設定した)。今年は目標を7%から8%に引き上げた。

今後中国がどうなっていくか、皆さんがよく考えて会社を引っ張っていくようお願いしたい。